

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月10日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520499

研究課題名（和文）

語形成から分析する後期近代英語：小説黎明期に見る女性の文体を中心として

研究課題名（英文）

Late Modern English as Seen through “Word Formation” :

With Special Reference to the Stylistic Features of Female Writers during the Rising Period of the Novel

研究代表者

協本 恭子 (Kyoko Wakimoto)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授 研究者番号：00258295

研究成果の概要（和文）：

本研究は、17世紀末から18世紀中葉に至る後期近代英語について、「語形成」(word formation)の観点からその発達の様相を辿るものである。中でも、当時の語彙多様化の一因を、この時代を代表する作家 Samuel Richardson (1689-1761)に見出し、Richardsonの3つの書簡体小説 (*Pamela* (1740), *Clarissa* (1747-48), *Sir Charles Grandison* (1753-54))を、同時代の、特に女性作家の作品と比較の上、調査・分析していった。Richardsonが使用し始めた語彙の構造を分析し、また特殊な意味・用法を持つ具体例を挙げることで、Richardsonが後続の女性作家に与えた影響を併せて検証した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to examine the development of Late Modern English from the viewpoint of “word formation.” My linguistic material is focused on to the epistolary novels written by Samuel Richardson who, I assume, must have been innovative in creating new words, and thus could have influenced female writers of succeeding generations. I have proved this assumption, partly by analyzing the lexical structure of specific examples, and partly by comparing his works with those of his contemporary writers, particularly of female writers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：語形成 (word formation), 後期近代英語 (Late Modern English), 文体的特徴 (stylistic feature), Samuel Richardson, 英語文献学 (English Philology)

1. 研究開始当初の背景

過去に於いて、英国の小説黎明期の文学作品を語学的に調査した先行研究は乏しかったが、近年盛んに利用されるようになったコーパスにより、英語文献学の研究の道は大きく開かれてきている。折しも、歴史言語学で著名なライデン大学の Tiekens-Boon van Oostade 氏による近年の書 *An Introduction to Late Modern English* (2009) の Synopsis の中で、“Late Modern English currently generates a lot of scholarly attention, mainly due to new developments in sociohistorical linguistics and corpus linguistics.” と謳われているように、これまで余り脚光を浴びてこなかった「後期近代英語」の研究に、今注目が集められている。このような動向にあって、従来調査の対象にされることの少なかった時代の散文を、「語形成」(word formation) の観点から分析することには大いに意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、「後期近代英語の散文における語彙多様化の一因は Samuel Richardson にある」という仮説の基、Richardson を境に、その前後に書かれた散文にどのような変化が見られるのか、「派生」(ゼロ派生を含む)、「複合」の調査を通じて検証することを主な研究目的とした。

併せて、近代英語の散文のコーパスを活

用して時代の傾向を掴むと共に、女性を主人公、準主人公に心理描写した Richardson の言語使用が、時代の次の担い手となる作家、特に Jane Austen のような女性作家にどのような文体的影響を与えたのかを明らかにすることにも重点を置いた。

3. 研究の方法

本研究は、科学研究費交付を受けた三年の研究期間に、以下の三つのステップを踏んで調査・考察を行っていった。

(1) Richardson の3つの書簡体小説 (*Pamela* (1740), *Clarissa* (1747-48), *Sir Charles Grandison* (1753-54)) に見られる特徴的な語彙を、語形成の面から分析する。

(分析に当たっては、後期近代英語を多面的に概観した Görlach (2001), 語形成を包括的に扱った Marchand (1969) で触れられている複合の形態や接辞を参照の上、Richardson に特有な表現、独創性に富む語彙の特徴に目を向けて考察していった)。

(2) 17世紀末期から18世紀に至る100年余りの期間の散文のコーパスを、作家の性別に分けて、その語彙の使用傾向を割り出し、Richardson の場合と比較・考察する。

(3) Richardson の最初の作品 *Pamela* (1740) の前後の期間は、特に女性作家による散文

について、上の (1), (2) で出した分析結果と照らし合わせると共に、Fanny Burney, Jane Austen のような後続の作家への影響も考察する。

4. 研究成果

初年度である平成 22 年度には、Richardson の最初の書簡体小説 *Pamela* (1740) や長編の大作 *Clarissa* (1747-48) を資料に、その語彙の特徴を分析し、論文の形にまとめた。

初年度の考察結果を基に、二年目にあたる平成 23 年度には、主な所属学会である近代英語協会の第 28 回大会におけるシンポジウムにおいて、司会兼講師として発表したことが一つの大きな研究成果となった。それは、「文学作品に見られる否定表現の通時的考察—社会的・心理的視点からのアプローチ—」をテーマとするシンポジウムの中での発表であるが、自らが企画と司会を担当した。初期近代英語期からビクトリア朝までの否定表現の諸相を、それぞれの時代を専門とする研究者が共通の問題意識をもって分析することで、多面的・重層的な考察へと繋がったことが、この研究の大きな成果と言える。

最終年度にあたる平成 24 年度には、学会誌や所属部局の研究集録に論文を発表すると共に、これまでの調査・研究の総まとめをしていった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

① 脇本 恭子, 「Richardson の小説に見る否定表現としての合成語」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 査読無, 第149号, 2012, 33-42.

<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/48182>

② 脇本 恭子, 「否定の縮約形についての一考察—Richardson を中心として—」, 岡山英文学会学会誌 『ペルシカ』, 査読有, 第39号, 2012, 109-120.

③ 脇本 恭子, 「Richardson の小説における *un-* 派生語の考察」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 査読無, 第147号, 2011, 69-79.

<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/47105>

④ 脇本 恭子, 「否定の接辞が作る対義語についての一考察—Richardson の作品を資料として—」, 岡山英文学会学会誌 『ペルシカ』, 査読有, 第38号, 2011, 95-109.

⑤ 脇本 恭子, 「語学的文体論の大学教育への応用—英語専攻の学生を対象として—」, 岡山英文学会学会誌 『ペルシカ』, 査読有, 第37号, 2010, 95-118.

⑥ 脇本 恭子, 「Richardson の *Pamela* における性差に基づく対語について」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 査読無, 第144号, 2010, 75-83.

<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/40068>

[学会発表] (計 2 件)

① 脇本 恭子, 「Samuel Richardson の小説における否定表現」, 近代英語協会第28回大会シンポジウム「文学作品に見られる否定表現の通時的考察—社会的・心理的視点からのアプローチ」, 2011年5月, 福岡女子大学.

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 258295

(2) 研究分担者
()

研究者番号:

② 脇本 恭子, 「英語史を通して学ぶ異文化・自文化理解—実践的指導に向けた英語学領域からのアプローチ」, ERA (広島英語研究会), 2010年5月, 広島大学.

(3) 連携研究者
()

研究者番号:

〔図書〕(計1件)

① 小迫 勝・瀬田 幸人・福永 信哲・脇本 恭子 編著, 英宝社, 『英語教育への新たな挑戦—英語教師の視点から—』, 2010.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

脇本 恭子 (Kyoko Wakimoto)